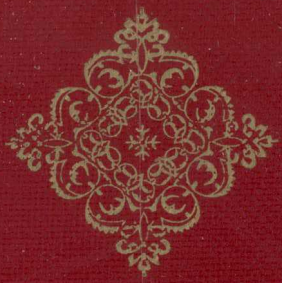


A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

45

A・トルストイ

苦悩の中を行く I

中央公論社

世界の文学　45　©1967

A・トルストイ

訳者　金子幸彦

昭和42年2月10日初版発行
昭和42年5月15日再版発行　価430円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

苦悩の中を行く　I　3

解説　497

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

苦悩の中を行く　I

革命当時のペテルブルク市街図
ネフカ河
ヴィボルク区
エラーギン島
エラーギン橋
カーメンヌイ島
カーメンノ・オストロフスキイ橋
アプチェカルスキイ島
モルスカヤ街
ペトロフスキイ島
ペトロフ橋
ペトログラード区
ペトロパブロフスキイ島
アレクサンドル連隊
ネヴァ河
トロイツキイ橋
リテイヌイ橋
スモーリヌイ
トチコフ橋
ビルニッスコイ橋
ペトロパブロフ要塞
マルスの広場
夏宮
パンテレイモン街
ペテルブルク大学
王宮橋
ヴァシーリエフスキイ島
海軍省
ミハイロフ宮殿
王宮広場
青銅の騎士像
ニコラエフスキイ橋
イサキイ寺院
ネフスキイ通り
モイカ川
ネフスキイ通り
スナメンスカヤ広場
ニコライ停車場
ボログフスキイ広場
ユスポフ公園
セミョーノフ練兵場
アレクサンドル・ネフスキイ修道院
ノヴォ・ヴォロンツォフ運河

第一部　姉妹

おお、ロシアの大地よ……

『イーゴリ軍記』

一

菩提樹の生い茂る、どこかの遠い片田舎の小路からたまたまおとずれた、余所者の見物人は、ペテルブルクに足を踏み入れながら、注意をこらすときに知的な興奮と精神的な圧迫感とのいりまじった、複雑な感情をいだいたものである。

入口に門番が居眠りをしている、暗い窓のならんだ、陰気な家々のそばを通って、霧深い、まっすぐな通りをぶらつきながら、水をたたえた、陰鬱なネヴァ河の水面をながいあいだながめたり、住み心地のわるそうな、暗い宮殿の列柱や、ペトロパヴロ寺院の、空高くつきでた、ロシア的でない尖塔、暗い波にゆれている、みすぼらしい小舟、薪を積んで花崗岩の河岸のそばを通ってゆく無数の平底船、まだ暗くならないうちからあかりのついた、かなたこなたの橋の薄青い線などを見わたしたり、あるいは道ゆく人々の、さながら都会のようこれのような目をした、蒼白い、気づかわしげな顔を見たりして――それらのすべてを注意ぶかく観察していると、余所者の見物人は、それがおだやかな考えの人なら、えりのなかへいっそう深くくびをうずめてしまうし、またもしおだやかでない考えの人なら、この凍りついたような魅惑を力一杯に打ちたたいて、こなごなにくだいてしまいたくなる。

まだピョートル一世の時代のこと、いまでもトロイツキイ橋の近くに建っているトロイツカヤ教会の寺男が、鐘楼からおりてきたところで、くらやみに幽霊を見かけた――それは帽子もかぶらぬ、やせた女のすがたをしていた。寺男はひどくおどろいて、そののち、居酒屋で酒に酔っては、大声でこんなことを言いふらした。『ペテルブルクは荒野が原となるだろうと言ってたぜ』――そして、そのために彼は捕えられ、秘密警察できびしい糾問をうけ、むちで容赦なく打ちすえられた。

ペテルブルクが悪魔にとりつかれていると考えられるようになったのは、その時からのことにちがいない。ヴァシーリエフスキイ島の街路を悪魔が辻馬車に乗ってゆくのを目撃した人たちがいた。またあるときは、河の水かさが増し、あらしの吹きすさぶ真夜中に、馬にうちまたがったピョートル帝の銅像が、花崗岩の台座からぬけ

だして、石畳の上を駆けて行ったこともある。またひとりの枢密顧問官が馬車に乗ってゆくと、いきなりその窓ガラスに、死人――官吏の亡者がへばりついたこともある。このようなうわさが数えきれぬほど市中にひろまっていった。

だから、ついこのあいだも、詩人アレクセイ・アレクセーエヴィッチ・ベスソーノフは、夜おそく上等の馬車を駆って島へゆく道すがら、ある小さな太鼓橋をわたるとき、ちぎれた雲のあいだから、はてしない空の高みに一つの星をみとめ、なみだをとおして、その星をながめているうちに、自分の乗っている馬車も、街燈の列も、背後に眠っているペテルブルクの全市街も、すべて空しい想念にすぎない――酒と恋と倦怠とにくもった頭のなかをさまよう夢にすぎない、と考えたのである。

夢のように二世紀がすぎ去った。大地のはずれの、沼と荒地のなかにあって、ペテルブルクははてしのない栄光と権力とを夢みてきた。宮廷革命、皇帝の暗殺、勝利と血なまぐさい処刑――これらのものが悪夢のように現われては消えていった。か弱い女たちが神に近いほどの権力をもつにいたったこともある。熱い、乱れた寝床のなかで、国民の運命がきめられることもあった。たくましい体格の、土まみれの手をした、頑丈な若者たちがやってきては、権力と寝台とビザンチンの栄華とにあやかろうとして、大胆にも、玉座のほうへと進んだ。

近隣の国々は幻想の、こうした狂乱の発作を恐怖の念をもって見ていた。ロシアの国民は恐れと悲しみとをこめて首都の動きを見守っていた。ペテルブルクの亡霊たちはロシアの国土の血を吸ってきたが、吸い飽きるということがなかった。

ペテルブルクはさわがしく冷やかな、飽満した、深夜の生活をつづけてきた。もの狂おしい、淫乱な、ほの白い夏の夜、眠りのない冬の夜、トランプの卓、金貨のひびき、音楽、窓ごしにうつる、踊り狂う男女の群れ、疾走するトロイカ、ジプシイたち、夜明けの決闘、そして、氷のような寒風が吹きすさび、らっぱが鋭く鳴りひびくなかで、皇帝のビザンチン式の、人の心に恐怖の念を呼び起こすような眼差のまえで行なわれる閲兵式。こういうのがこの都の生活であった。

最近十年のあいだに、大規模な事業が信じられないような速さでつぎつぎと起こされてきた。数百万の資本が空中のまぼろしのように現われて、土質ガラスとセメントで、銀行や、ミュジック・ホールや、スケート場などが建てられ、また豪華な酒場が開かれて、音楽や鏡、半裸の女やまばゆい光、シャンペンなどで人の心をうばうようになった。賭博クラブ、待合、劇場、映画館、夜の公園などがあわただしく開かれた。建築技師と資本家と

が、ペテルブルクからほど遠からぬ、まだ人の住んでいない島の上に、いまだかつて見られなかったような、ぜいたくな、新しい首都の建設工事を進めていた。

首都には自殺が流行した。法廷は血なまぐさい人騒がせな事件の裁判をむさぼるように傍聴する、ヒステリックな女たちでみちあふれていた。放逸、淫蕩——どんなことも可能であった。頽廃の気風がいたるところにゆきわたり、宮廷もそれに感染した。

ついに、狂人の目と、たくましい男性の力とをそなえた、ひとりの無学文盲の百姓が、官殿にはいりこんで、皇帝の玉座のそばに近づき、ロシアを愚弄し、あざけり、ロシアの顔に泥をぬるにいたった。ペテルブルクも、あらゆる他の都市と同じように、緊張した、不安な、単一の生活をつづけてきた。中央集権がこの動きを支配していた。しかし中央集権は首都の精神とも呼びうべきものと一つに融け合ってはいなかった。それは秩序や安寧や便宜をつくりだすことに努めた。しかし首都の精神そのものは、そのような力の破壊に努めた。破壊の精神はあらゆるもののうちにひそみ、人の生命をうばう毒素でもって、有名なサーシカ・サケリマンの、大規模な株式上の陰謀や、鉄工場の労働者たちの暗い憎悪や、芸術家のたまり場《赤い小鼓》に朝の四時すぎからきている流行の女詩人の、なみはずれた空想を育てた。——そればかりではない、もともとそうした破壊の精神に反抗しなければならないはずの人々までが、知らず知らずのうちに、そうした精神に力をかして、これをますます極端なものとするために、あらゆることを行なっていた。

それは愛とか、善良な健全な感情とかいうものが、卑俗な、旧式なものと考えられていた時代である。だれも恋愛をしなかった。しかしそれでいてすべての者が飢えていた。そして毒された者のように、あらゆる、するどい、刺戟的なものを求めた。

むすめたちは処女であることをかくしていた。夫婦は——自分たちの貞節をかくした。破壊がよき趣味と見なされ、神経衰弱が優雅の特徴と考えられた。この期間にだけ、無の状態からのし上がった流行作家たちが、そうした気風を指導した。人々は無味乾燥と言われないために、自分自身の上に罪と堕落を考えだそうとしていた。

これが一九一四年のペテルブルクであった。うちつづく徹夜の騒ぎにさいなまれ、酒と黄金と、愛なき恋と、たいくつな、力なく官能の愉楽をそそるタンゴの楽の音——死の前奏曲——などに憂愁をまぎらせながら、ペテルブルクは、まるで恐ろしい運命の日を待つもののように、生活をつづけていた。そこへさまざまな先駆者たちが現われた。——えたいのしれない、新しいものが、ありとあらゆるすきまから、はいだしてきたのである。

二

「……われわれはなにも思い出そうとはしません。われわれはこう言う――もうたくさんだ。過去に背を向けよ！　わたしのうしろにあるあれはなんだ？　ミロのヴィーナスか？　どうだろう、ヴィーナスは食べられるだろうか？　それともヴィーナスは養毛に効き目があるのだろうか？　こんな石造の、獣の屍体みたいなものがなんでわたしに必要なのか、わたしにはさっぱりわからない。ところがこれが芸術だ、芸術品だと言う。ブル、ル、ル！　諸君はまだ相変わらず、そんな考えで自分の足のうらをくすぐるのが好きなんですか？　わきを、前方を、足もとを見てください。諸君はアメリカ製の靴をはいていますね？　アメリカ靴万歳です。赤い自動車、グッタペルカのタイヤ、一ブードのガソリン、そして百キロの時速。これこそ芸術だ。無限の天地を突っ走ろうという気持に駆られます。また十メートル以上の大看板と、そこにかいてある、太陽のようにかがやくシルク・ハットをかぶって、めかしこんだ、どこかの若者――これこそ芸術です。それは洋服屋であり、芸術家であり、現代の天才です！　わたしは生活を食いつくしたい。ところが諸君は、性的不能者の用いる、甘ったるい飲料をのませようとするんです……」

高等学校や大学の青年たちのつめかけている、せまい会場のかたすみで、椅子の列の向こう側に、拍手と笑声が起きた。弁士セルゲイ・セルゲーエヴィッチ・サポーシコフは、しめっぽい口もとに皮肉な笑いをうかべながら、大きな鼻へずりおちる鼻めがねを直して、かしわ造りの、頑丈な演壇の階段を威勢よくおりて行った。

演壇のわきには、長いテーブルをまえにして、《哲学夜話会》の会員たちがならび、五本のほそい電球をさした、二つの大燭台がこれを照らしている。そこには会長の神学教授アントーノフスキイも、この日の当番幹事、歴史家ヴェリヤミーノフも、哲学者ポールスキイも、ぬけめのない作家サクーニンもいた。

その冬《哲学夜話会》は、あまり名の知られた者のいない、しかしかたくなで議論好きの、若い連中の一団から、はげしい攻撃をうけていた。彼らはつよい怒りをこめて、年とった大作家たちや尊敬すべき哲学者たちに喰ってかかり、乱暴な、不遜なのののしりを浴びせるので、会の所在地であるフォンタンカの古い一戸建の家は土曜日ごとの公開講演日には満員になるのであった。

その晩もそうだった。サポーシコフが熱狂的な拍手を浴びながら群集のなかへすがたを消すと、でこぼこの多い、刈りたての頭の、頬骨のつきでた、黄いろい顔の、あまり背の高くない、若い男――アクンジンが演壇へ飛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

びあがった。彼はちかごろこの会場へ現われたのである。しかしその人気は――とりわけ傍聴席の後列での、彼の人気はすばらしいものだった。彼がどこからきたのか、いかなる人物か、とたずねられるたびに、それを知っている人たちは謎のような笑みをうかべた。しかしそれにしても、彼の姓がアクンジンでないことはたしかだった。彼は外国からきたのである。しかも彼はわけもなく立ち現われたのではない。

まばらなあごひげをひねりながら、アクンジンはしずまり返った会場を見わたし、口もとに小さなしわをうかべて微笑した。そして彼はしゃべりはじめた。

三列目の座席の、まんなかの通路のそばに、黒ラシャの服に首もとまで身をつつんだ、若いむすめがにぎりこぶしをあごにあてて腰かけていた。灰色の、ほそい髪を耳の上へかきあげ、大きく巻いて、櫛でとめていた。身動きもせず、笑顔も見せないで、彼女はみどり色のテーブルのまえの人たちを見ていた。その日はときどきながいあいだろうそくの灯に注がれた。

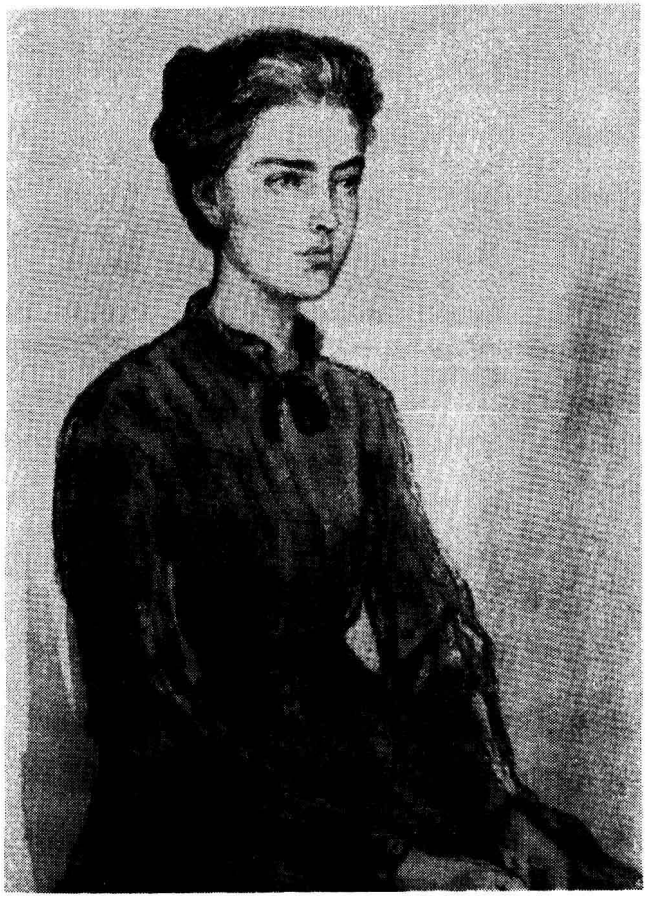
アクンジンが、かしわ造りの演壇をたたいて、「世界の経済学は、教会の丸屋根に、その鉄拳の最初の一撃を加えるでありましょう」と叫んだとき、むすめはかすかにため息をついた。そして、おされて下側の赤くなったあごから、にぎりこぶしをはなして、キャラメルを口に入れた。

アクンジンはしゃべりつづけた

「……しかるに諸君は相変わらず、地上の神の王国について、ただ漠然と夢みている。しかし彼ら民衆は、われわれがどれほど努力しても、眠りつづけているのだ。それとも諸君は、彼らがいつかは目をさまして、ワラームの牝ろばのように語りはじめるのをあてにしているのですか？　さよう、彼らは目をさますでしょう。しかし、彼らの眠りを破るのは、諸君の詩人たちの、甘ったるい声ではありません。香炉の煙でもありません――民衆の眠りを破ることのできるものは、工場の汽笛のみです。彼らは眠りからさめて、しゃべりだす、彼らの声は耳に不快でしょう。それとも諸君は、諸君の谷間と沼とをあてにしているのですか？　ここでさらに半世紀のあいだ、まどろむこともできましょう、わたしは、そう信じています。しかしこれを救世主の到来だなどと呼ぶべきではない。それは近づくのではなく、遠のいてゆくのだ。ペテルブルクの、このりっぱな広間で、《ロシアの百姓》というものが考えだされた。彼らについて数百冊の本が書かれ、オペラがつくられました。しかしこうした気ばらしが大きな流血の惨事で終わらなければいいが――わたしはこのことを恐れているのであります……」

しかし、ここで議長は弁士をおしとめた。アクンジン

はかすかな笑いをうかべ、上衣のポケットから大きなハンケチをとりだして、いつものくせで頭や顔をこすった。会場の一隅から叫び声が起きた。
「しゃべらせろ！」
「言論を拘束するのは恥だぞ！」
「人を愚弄するものだ！」
「そこの、うしろのほうの人たち、しずかにねがいます」
「自分こそしずかにしたまえ！」
アクンジンはつづけた。
「……ロシアの百姓にはさまざまな理念が適用されます。そうです。しかし、もしそれらの理念が彼らの永遠の希望、正義についての初原的な観念、全人類的な観念――と有機的に結びついていないならば、それらの理念は石の上の種子のように枯れてしまいます。ロシアの百姓を単に一個の、飢えた胃袋と労働にすりへった背骨との持主にすぎないと見ることをやめないかぎり、そして最後に、かつてどこかの地主によって考えだされた、ロシアの百姓のメシヤ的な特質をとり除かないかぎり、二つの極点が悲劇的な存在をつづけるでしょう。二つの極点とはすなわち、書斎のくらがりに生まれた、諸君の美しい理念と、諸君がなに一つ知ろうとしない民衆とであります……われわれはここで諸君を本質的に批判するつもりはありません。人類の幻想という、この異常な現象の再検討に時間を浪費することはばかげたことです。そんなことではない。われわれはこう言いたいのです――諸君、手おくれにならぬうちに身を救いたまえ、と。けだし諸君の理想と、諸君の財宝とは、惜しげもなく、歴史のごみ箱に放りこまれることになるでしょう……」
黒ラシャ服のむすめは、かしわ造りの演壇で語られている話の内容を、深く考えてみたいような気持になっていなかった。彼女には、それらのことばや論争のすべてが、もちろん非常に意味ぶかい、重要なことのように思われた。しかしなによりも重要なのはこれらの人たちが話さなかった、ほかのことなのだという気がしていた。
このとき、みどり色のテーブルのまえに、新しい人物がすがたを見せた。彼は会長のとなりの席にゆっくりと腰をおろし、両わきの人々に軽くうなずいて、雪にぬれた亜麻色の髪を赤くなった片手でなでつけ、それからテーブルの下へ両手をかくして、すこぶるほそい黒のフロックにつつんだ体を、まっすぐにのばした。やせた、つやのない顔、弓形のまゆ、その下の、陰になった、大きな、灰色の目、帽子のように頭をつつんでいる髪――週刊誌の最近号にのっていたアレクセイ・アレクセーエヴィッチ・ベスソーノフの肖像と全くおなじであった。
むすめはこの、ほとんど近よりがたいほどに美しい顔



のほかには、なにも見ていなかった。彼女は風の吹きすさぶペテルブルクの夜々に、かくもしばしば夢のなかに現われた、このふしぎな顔に、まるで恐怖におそわれたように、注意の目をこらしていた。

そのとき彼は、隣席の人のほうへ耳をかたむけて、微笑した。その微笑は平凡なものだった。しかしほそい鼻孔の線や、あまりにも女性的なまゆや、その顔の、一種特別な、やわらかい力のなかには、背信と、不遜と、さらに、彼女の理解できない、しかしなによりもつよく彼女の胸を波立たせていた何ものかがあった。

そのとき金ぶちめがねをかけて、あごひげを生やし、禿頭のまわりに色あせた一束の金髪をのこした、赤い顔の報告者ヴェリヤミーノフがアクンジンにつぎのように答えていた。

「……なだれが山から落ちるとき、それが正当であるように、あなたもまた正しい。われわれは久しいまえから恐ろしい時代の到来を予期していました。あなたの真理が勝利することを予測していました。われわれとはちがって、あなた方は自然発生的な力をもっている。しかしわれわれは知っています。あなた方は工場のサイレンをもって最高の正義を征服しようと呼びかけているが、その最高の正義もがらくたの山となり、耳しいた人のさまよう混沌となるでしょう。『この渇きをどうしよう？』と彼は言うでしょう。それはつまり彼自身のなかに一かけらの神の恵みもないからです。用心しなさい――こう言いながらヴェリヤミーノフは、鉛筆のように細長い指をあげて、いかめしい態度で、めがねごしに、傍聴席を見わたした。「あなた方の夢みている楽園で、そのためにあなた方が人間を生きた機械に、番号に、そう、人間を番号に変えてしまおうとしているその楽園において。この恐ろしい楽園のなかには、新しい革命が迫っている。あらゆる革命のなかでいちばん恐ろしい革命――すなわち霊魂の革命です……」

アクンジンが自席から冷やかに叫んだ。

「人間を番号にする――それも観念論だ」

ヴェリヤミーノフはテーブルの上で両手をひろげた。シャンデリアがその禿頭に明るい光を投げていた。彼は現世のおちいっている罪悪について、未来の、恐ろしい懲罰について語りはじめた。会場のあちらこちらではせきばらいの声が起きた。

休憩時間に、さきほどのむすめは食堂へ行った。まゆをよせ、ひとり離れて、戸口の近くに立っていた。

夫人同伴の弁護士たちがいくたりか集まって茶をのみながら、ほかのだれよりも大きな声で話し合っていた。煖炉のそばでは有名な作家のチェルノブィリンが魚のフライとこけもものを食べながら、そばを通る人のほうをた

えずふりむいて、酔いのまわった、意地のわるそうな目で見ていた。

大きなリボンをつけた、くび筋のよごれた、中年のふたりの文学婦人が売台のそばで、サンドイッチを食べていた。部屋の片すみには、俗界の人たちから離れて、神父たちがつつましやかに立っていた。シャンデリアの下では、半白の髪をわざとふりみだした批評家のチルヴァが、長いフロック・コートの下でうしろに手をくみ合わせ、一つところでかかとを上げたり下げたりしながら、だれかの近づいてくるのを待っていた。ヴェリヤミーノフがはいってきた。すると文学婦人のひとりがそばへとんで行って、彼のそでぐちをつかんだ。もうひとりの文学婦人も食べるのを急にやめて、ひざにこぼれたパンのかけらをはらい落とし、首をかしげて、目を見はった。ベスソーノフがうやうやしげに首をかたむけて左右の人人と会釈を交わしながら、そばへきた。

黒服のむすめは、その文学婦人がコルセットの下で身がまえたのを、自分の肌のすべてで感じた。ベスソーノフはだるそうな微笑をうかべながら、婦人になにやら話した。彼女は肉づきのいい手をうち合わせて、目をつりあげながら、大声で笑いだした。

黒服のむすめは片方の肩をすくめて、食堂から出た。そのときだれかが彼女を呼びとめた。ビロードの上衣を着た、あさ黒い、やせた青年が人々をおし分け、彼女のほうへ近づいて、うれしそうに会釈をし、満足のあまり小鼻にしわをよせながら、彼女の手をかたくにぎった。青年のてのひらはしめっぽかった。ひたいには汗にぬれた髪の房が垂れさがっていた。うるおいをおびた、きれ長の、黒い目がおだやかに彼女を見つめていた。彼はアレクサンドル・イヴァーノヴィッチ・ジローフという名であった。彼は言った。

「こんなところに？　ダーリヤ・ドミートリエヴナ、ここでなにをしていらっしゃるんです？」

「あなたと同じようなことを」こう言って、彼女はにぎられていた手をひき離し、マフのなかへひっこめ、そこでハンケチでぬぐった。

青年は笑って、ますます甘ったるい目つきで見ながら、言った。

「こんどもサポーシコフがお気に召さなかったわけではないでしょうね？　彼の今日の話はまるで予言者みたいでしたね。遠慮のない、独特な表現が、あなたの神経をいら立たせるんです。しかし彼の思想の本質そのもの――あれは、われわれがひそかに望みながら、ことばに出すのを恐れていたことではないでしょうか？　それを彼はあえて口にしたんです。こういうことです。

われらみな、若き、若き者
腹にはげしき飢えをいだく。
われら虚空を喰いつくさん……

非凡です。新しくて大胆です。ダーリヤ・ドミートリエヴナ、あなただって、感じるでしょう、このなかの全く新しい主題を。われわれの、新しい、あくことを知らぬ、大胆な主題を。アクンジンだってやはりそうです。あれは論理的にすぎるところがありますけど、しかし要点をつくのは実にうまいですな！　こんな冬がもう二、三度まわってくると、すべてばらばらになって、くずれ去るようになりますよ――実際すばらしいことです！」

甘い、おだやかな微笑をうかべながら、しずかな声で彼は話した。ダーシャ（ダーリヤの愛称）は彼の全身が、恐ろしい興奮に駆られたように、こまかくふるえているのを感じていた。彼女はしまいまで聞かないで一つうなずくと、人ごみのあいだを、外套掛けのほうへ行った。

胸にメダルをいくつもぶら下げた、無愛想な下足番は、無数にならんだ毛皮外套やオーバ・シューズに忙殺されていて、ダーシャのさしだした番号札には、注意を向けなかった。長いこと待たなければならなかった。ドアがあいたりしまったりしている、なんの飾りつけもない玄関から、冷たい風が足もとへ吹きつけていた。その玄関のまえには、ぬれた青い長上衣を着た、辻馬車の御者たちが立って、出てゆく人々に、陽気に、あつかましく、呼びかけていた。

「だんな、威勢のいいのにお乗んなさい！」

「ペスキ街なら、ちょうど帰りでさあ」

そのとき急に、ダーシャのうしろに、ベスソーノフのはっきりとした、冷たい声がきこえた。

「毛皮外套と帽子とステッキ」

ダーシャは背中を軽くつつかれたような気がして、すばやくうしろをふりむき、ベスソーノフの目をまっすぐに見た。ベスソーノフは彼女の視線を、当然のもののように、おちついてうけとめた。しかしまもなく彼のまぶたもふるえだした。灰色の目のなかにはいきいきとしたうるおいが現われた。その目は譲歩のような色をうかべた。そしてダーシャは心がおののくのをおぼえた。

「たしか、あなたには」彼はダーシャのほうへ身をかがめるようにして言った。「お姉さまのところで、お会いしましたね」

ダーシャはすぐに大胆に答えた。

「ええ、お目にかかりました」

そして下足番から毛皮外套をひったくるようにうけとって、正面の戸口のほうへ走りだした。通りへ出ると、しめっぽい、冷たい風が彼女の服をつつみ、よごれたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo